

インテグラル思想研究会
 Individual Holon と Social Holon (Part One)
 鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)
 2007年1月27日 (土曜日)

はじめに

インテグラル思想を理解・実践するとは、即ち、“Basic Moral Intuition” (BMI・“protect and promote the greatest depth for the greatest span”・「最大範囲において最大の深みを保護・推進する」) (Wilber, 2000a, p. 358) にもとづいて、AQALの包括的な福利にたいして責任をもつということである。そして、それは、必然的に、人間存在を規定する「個」(individual)と「集合」(collective)の両側面の特徴に留意して、その進化に建設的に参画するということを意味する。そこにおいて、探求と実践は、進化への参画という目的を実現するための相補的な必要要素として抱擁されることになるのである。

ここでは、インテグラル思想において“Individual Holon”(「個的存在」)と“Social Holon”(「社会的存在」)がどのように定義されているかを理解したうえで、両者の包括的な成熟にたいして具体的にわれわれがどのように貢献をすることができるのかを検討をする。こうした目的を達成するために、今回は、林 道義博士の『父性の復権』(1996)と『母性の復権』(1999)を参照しながら、人間存在を規定する「父性」と「母性」というこの対極的なダイナミズムにたいする洞察が提供してくれる豊富な叡智を確認したい。

尚、上記の2作品は、Vision Logic (VL) 段階の意識構造を基盤として、現代における共同体の育成の課題について検討した傑出した研究書である。それらは、今後、国内において、真にインテグラルな視野から実践活動を展開していくうえで、ひとつの具体的な方向性を照明してくれる貴重な業績とすることができるだろう。

Individual Holon と Social Holon

Individual Holon と Social Holon について理解をする際、下記の事項を理解する必要がある (Wilber, 2006, pp. 142-162)。

* Dominant Monad

“Dominant Monad”とは、「全構成要素を組織・統括する能力」(“an organizing or governing capacity that all subcomponents follow”)と定義される。Individual Holon は、Dominant Monad を所有している。Social Holon は、Dominant Monad を所有していない。

* Dominant Mode of Mutual Resonance

“Dominant Mode of Mutual Resonance”とは、「共同体における構成員間の意思疎通のありかたを規定する支配的な意思疎通形態」と定義される。個人が共同体に適応することができるためには、共同体において使用されている基本的な意思疎通形態と共振することができなければならない。つまり、共同体の構成員になるためには、個人は、そこにおいて支配的なものとして機能している意思疎通形態を修得することが必要となるのである。また、こうした共振を共有することをとおして、Social Holon は、構成員の行動を緊密に統括することができるのである。

時として、共同体が生存するためには——そして、また、個人が生存するためには——こうした支配的な意思疎通形態を確立して、それにたいする構成員の尊重を要求することが必要となる。こうした尊重をすることができない個人は、必然的に、共同体から放擲・排除・攻撃されることになる。

しばしば指摘されるように、こうした共同体の機能は、時として「抑圧の装置」としてはたらくことになる。価値相対性を強調する今日の文化的状況において、共同体の持続可能性の確保のための重要要素として規範（支配的意思疎通形態）の必要性を訴えることは、そうした抑圧を助長する行為として、批判にさらされることになるのである。しかし、実際には、そうした批判は、共同体の機能のひとつの側面を過大に強調するものでしかない。また、たとえこうした共同体の装置が抑圧的なものとなることがあるとしても、そこで必要となるのは、「多様性の尊重」の大儀のもとに、そうした装置の必要性を否定することではなく、むしろ、支配的な意思疎通形態を規定している価値観を進化させていることである。共同体の構成員が相互に共振するための装置の必要性を否定することは、本質的に、共同体の持続可能性にたいする責任を放棄して、その溶解・破壊に加担することではないのである。

* Mandatory Stages of Development

発達心理学の調査・研究が示唆するように、個人（Individual Holon）は、普遍的な発達過程を段階的に成長していく。意識構造の成長過程において、段階がバイパスされることはないのである。しかし、集合（Social Holon）の変化を把握するときには、こうした段階的な発想にもとづいて分析をすることができないことに留意する必要がある。

上記のように、Social Holon は、支配的な意思疎通形態（dominant mode of discourse）をとおして機能する存在である。そして、この意思疎通形態は、基本的に、この意思疎通形態を尊重して相互交流をする構成員の意識構造に定義されることになる。しかし、構成員の突然の流動により、構成員の構成比が変化するとき、そこでの支配的な意思疎通形態は瞬時に変化することになる。そして、その変化は普遍的な発達過程を段階的に踏襲するものではないのである。

例えば、組織において、大多数の構成員が **Diplomats** である場合、普通、そこでの支配的な意思疎通形態は **Blue vMeme** に特徴づけられたものとなる。しかし、組織の経営陣の取替えを契機として、構成員の大多数が **Individualists** となる場合、そこでの支配的な意思疎通形態は **Green vMeme** に特徴づけられたものへと変化することになる。ここでは、組織を規定する支配的な意思疎通形態が普遍的な発達過程を段階的に踏襲することなく変化していることが認識されるであろう。

共同体が普遍的な発達過程を段階的に踏襲することを主張する諸々の理論は、普通、「垂直的段階」(stages)ではなく、むしろ、「水平的段階」(phases・cycles)について照明するものである。例えば、あらゆる共同体が経験するという「発足→成長→成熟→衰退」という過程は、支配的な意思疎通形態がどの段階にあらうとも、経験されるものである。つまり、これは水平的段階と形容することのできるものなのである。重要なことは、**Social Holon** について把握するうえで、この両方を把握する複合的な視野をもつということである。

尚、ここで留意するべきもうひとつのことは、下記の事項である。

大局的な歴史的な視野には、社会は普遍的な発達過程を段階的に踏襲しているように映じる(例：“Up From Eden”)。ただ、ここで重要なことは、こうした段階的成長が、実際には、社会の支配的な意思疎通形態を規定する責務を負うことになる共同体内の先進的な構成員の意識構造により実現されているものであるということである。つまり、「社会の成長」とは、実際には、そこにおける意思疎通形態を規定する影響を発揮する個人の段階的な成長に起因するものなのである。その意味では、「社会の成長」とは、多様な発達段階の構成員が、そこでの支配的な意思疎通形態を巡って、相互に交渉をする過程を通じて実現される非常に複雑な過程ということができるだろう。

BMI の精神にもとづいて、共同体の福利にたいする責任を抱擁するとは、必然的に、人格の陶冶をとおして自己の内部に先駆的な視野を確立して、それを基盤として共同体の意思疎通形態の規定に建設的に参画することを意味する(一人称・二人称・三人称の **ITP** の実践)。そして、そうした行為は、破壊主義者 (deconstructive postmodernists) の主張にあるように、意思疎通形態を支配の装置として破壊する態度ではなく、むしろ、再構築主義者 (reconstructive postmodernists) の主張にあるように、共同体の存在のための必要装置として意思疎通形態の特性を認識したうえで、それを向上(変容)しようとする継承と超越 (transcend and include) の姿勢に支えられている必要があるのである。**Mean Green vMeme** と形容される破壊主義者の影響のもと、共同体の持続可能性を保障する規範が溶解している今日の時代状況において、インテグラル思想を実践するとは、不可避的に、こうした姿勢を自己のなかに確立して、共同体の再生のために尽力をすることを意味するのである。

インテグラリストとしてのこうした責任を果たしていくうえで、貴重な洞察を提供してくれるのが、林 道義博士の研究である。

父性

留意事項

父性について理解をするうえで、まず、下記の事項を確認する必要がある（林, 1996, pp. 206-211）。

- * 父性は、男性と女性の両方がもつことのできる、また、もたなければならない性質である。しかし、これは、必ずしも、男性と女性の両方が同等に父性を体現することができるということを意味するものではない。父性が父性と名付けられていることには、父性を体現する責任を負うのは、男性であることが適切であるという主張があるのである。
- * 男性性（Masculinity）があくまでも個人としての性質を形容する概念であるのにたいして、父性は、関係性のなかで他者にたいして表現される性質である。それは、インテグラル思想において愛（“Agape”）と形容される性質のひとつの表現形態として理解することができるだろう。

父性の諸条件

* 統合する能力

父性の最も重要な要素は統合する能力である。共同体の中心となる価値観（構想・使命・目的等）を明示することをおして、共同体の諸々の構成要素（各構成員の個人的な欲求・感情・希望等）を統合する能力ということができるだろう。父性を発揮するとは、即ち、こうした構成員の内部に存在する内的欲求を統合して、ひとつの方向性へとまとめあげていくことなのである。必然的に、そうしたことを可能とするためには、共同体の統括者は、構成員間の建設的な対話を促進するための枠組を提示することができる必要がある。いうまでもなく、人間関係のなかでこうしたはたらきかけができるためには、個人は自己の内部に普遍的な説得性をもつ価値観を確立している必要がある。

ここで留意すべきことは、共同体をまとめあげるための中心（核・軸）とするべきものが、あくまでも個人の人格を超越した普遍的な価値である必要があるということである。この普遍的な価値のもとに、共同体の全構成員は自らの存在を位置づけられることになるのである。

共同体をまとめあげるための中心が個人の人格である場合、構成員は、そうして位置づけられた個人（統括者）の人格の構成要素として定義されることなる（Fascism）。統括者の人格を世界の中心に位置づけること（人格崇拜）は、幼

兒的な自己中心的ありかたへの退行ということが出来る。統括者のこうしたありかたを基盤として展開する関係性は、不可避免的に、諸々の閉鎖的集団において発生するような統括者の自己肥大をひきおこし、最終的には、共同体を破滅に誘うことになる。James Collins (2001) も指摘するように、真の父性を発揮しながら共同体の統括者としての責任を全うするためには、おうおうにして人格の魅力 (charisma) は否定的な影響をもたらすのである。

* 過去の文化的遺産の継承

共同体の維持・成長を促進するために必要となるのは、必ずしも具体的な行動の方法を教示することではなく、むしろ、核となる理念の理解を援助して、そして、それを具体的な場面において適用する能力を育成することである。James Collins (2001) も指摘するように、真の意味での自由と責任をあたえるためには、抽象的なレベルにおいて核となる理念を明示することができなくてはならないのである。こうした本質にたいする理解が欠如している限り、行動は外部から支配されつづける必要がある。

その意味では、共同体の統括者として父性を発揮することができるためには、まず、自らが徹底した自己探求を実践することをおして、普遍的な説得性をもつ思想を確立しておくことが必要となるといえるだろう。とりわけ、過去から将来へとつづいていく歴史の過程に参画する存在として——つまり、過去と将来にたいする責任を所有する存在として——自らの責務を認識・抱擁する思想を確立することは、父性を発揮するための必須要素といえるだろう。

こうした思想の確立は、普通、伝統的遺産の継承をおして可能となる。例えば、日常生活における所作の洗練を可能とする価値体系 (修身) ・季節の祝賀行事、そして、古典藝術の鑑賞と修得等は、Body・Mind・Heart・Soul・Spirit を動員した思想と感性の確立の具体的な実践ということが出来るだろう。そこにおいては、あらゆる技能 (art) の修得においてそうであるように、長期的・集中的な実践が要求される。父性を発揮することができるためには、自らがそうした人格陶冶の活動にとりくむことが必要となる。父性の発揮とは、そうした活動をおして体験することのできた喜びを他者にあたえようとする生命の根源的なはたらきなのである。

* 普遍的視点・客観的視点

父性の重要な要素のひとつは、普遍的な価値観を擁護することをおして共同体の枠組を血族のしがらみから解放することである。つまり、父性の視点は、構成員が生物学的にどのような部族に所属していようとも、そうした部族の論理を超越する普遍的な価値観の地平から彼らを公平にとりあつかおうとするのである。従って、共同体の統括者は自らの個人的感情や個人的利害の影響をしりぞけることのできる成熟した内省力を基盤とする克己の精神を確立する必要

がある。世界を内と外に峻別して、異なる道徳的基準を適応する神話的合理性段階 (Mythic-Rationality) の行動論理を拒絶して、「公」 (Public) の観点からみて、正義として認知することのできる判断をすることができなければならないのである。その意味では、父性とは、関係性 (LL) の領域に「世界中心主義」 (world-centrism) の確立することのできる能力であるということができらう。

ここにおいて、もうひとつ重要なことは、父性の視点が、共同体の内的福利 (LL) のみならず、共同体の外的福利 (LR) をも配慮するものであるということである。インテグラル思想は、集合的な外面領域を規定する判断基準を「機能適応」 (Functional Fit) と定義する。統括者は、共同体の生存条件 (Life Conditions) を客観的に把握したうえで、そうした外的な文脈のなかで共同体の持続可能性を維持・向上するための方法を探究する責任を負うのである。

共同体の生存状況を客観的に把握することができるために、統括者は、自己の内面に蠢く諸々の心理的傾向を理解しておく必要があることはいうまでもない。そうした内省力を基盤として自己のこころの動揺を律しながら、統括者は、刻々と変化する状況のなかで、共同体の目標と戦略を構築・実施していかなければならないのである。こうした内的能力の欠如している場合、統括者は、しばしば、世界に自らの個人的な経験・感情・希望を投影して、判断を誤ることになる。

自己の内面を客観的に観察 (対象化) して、それを律することができる内的能力 (intrapersonal intelligence) は、父性の重要な構成要素であるといえるだろう。

* Noblesse Oblige

共同体は統括者・統治者を必要とする。内部と外部の利害関係者の状況を把握して、共同体の目標と戦略を決定して、その実現のために必要な活動をする責任をとる人間がいなければ、共同体は麻痺状態に陥ることになる。また、統括者が無能であるとき、最悪の場合、共同体は破滅へと追い込まれることになる。つまり、共同体の運命にたいして決定的な影響力をもつのは、窮極的には、統括者・統治者なのである。その意味では、統括者・統治者は、真の意味での全体の福利にたいする関心 (BMI) を基盤にして、行動することができねばならない。父性とは、そうした責務を抱擁しようとする態度のことを意味するのである。

しかし、非常に残念なことに、国内においては、共同体の統括者・統治者として適切な優秀な人材をえらぶために必要とされる鑑識眼が集合的に欠如している。生育過程において、優れた父性の表現というものがいかなるものであるかを実際に体験していないために、大多数の人々は、そうした鑑識眼をもつために必要とされる感覚的な基盤そのものを有していないのである。今日において、

政治的な統治者とは、あくまでも自己の利権の確保をしてくれる利権屋 (power brokers) へと墮している。そこにおいては、全体の福利を考慮する俯瞰的な視野から賢明な判断と行動をする智慧と実行力を有する人物を選択するという判断基準は機能していないのである。

共同体の溶解

政治領域の病理に象徴されるように、日本は慢性的な父性の欠乏状態、即ち、Agape の機能不全状態にあるということが出来る。これは、共同体の責任者として次世代を育成することに日本人が集合規模で失敗しているということの意味する。実際、こうした状況は集合意識の地盤沈下をひきおこしており、その傾向に歯止がかかる気配はない。

KW の指摘するように、人間意識の発達過程とは、人間存在の構造的な自己中心性を社会化をとおして克服していく過程である。しかし、いうまでもなく、社会化とは、Agape の提供者としての先輩世代が責任を果たすことができるときに初めて機能するものである。諸々の歴史的な要因により、愛 (Eros と Agape) の交換という世代間の対話が成立しなくなるとき、共同体は、次世代の人間化 (社会化をとおして生来の自己中心性の克服を達成すること) という共同体の存続のための最重要課題の解決に失敗することになる。そのとき、共同体は、共同体を共同体たらしめる連帯の感覚 (sense of solidarity) を構成員のなかに醸成することに失敗することになる。そこにあるのは、もはや、Social Holon ではなく、相互に関連性をもたない個人の集積 (Heap) でしかないのである。

意識進化とは対象化の過程である。それは、ある段階における行動論理をより包括的・普遍的な行動論理の批判的な文脈へと曝すことである。つまり、そこにおいては、必ず、妥当性の否定の作業が行われることになるのである。こうして限定的な行動論理にたいして高次の包括的な視野から批判的文脈をもたらす Agape のはたらきこそ、父性の機能といえるのである。その意味では、愛の責任を果たすとは、相手にたいして成長の方向性を照明する対象化の文脈を提供することであるといえるだろう。「価値相対主義」の大儀のもと、「個性の尊重」や「多様性の尊重」等の美名をふりかざして、他者を「ありのまま」に受容することは、実際には、こうした責任を放棄することでしかないのである。

Spiral Dynamicsの創設者であるDon Edward Beck博士は、こうした価値相対主義 (Green vMeme) が共同体の統治権を掌握するとき、その共同体が溶解することを喝破した。こうした洞察は、価値相対主義という発想が、本質的に歴史の継承という人間としての責任を放棄するものであることにたいする認識に起因している。実際、国内における価値相対主義の蔓延は、Spiral Dynamicsにおいて予測されていたように、確実に共同体の秩序体系を溶解して、多様な形態での暴力性の暴発を助長している。価値相対主義は、確実に破壊のための破壊という自己の目標を完遂しようとしているのである。

権威

父性が Agape の表現形態であるということは、必然的に、そこには上下関係により特長づけられた人間関係が存在することを意味する。つまり、そこには、非常に端的に表現すれば、権威を発揮する人物と権威に服従する人間とが存在することになるのである。上記のように、父性は、より包括的な文脈を提供することをおして、相手に成長のための方向性を照明するものである。

しかし、こうした相互関係が正当なものとして成立するためには、いくつかの必要条件が整う必要がある。つまり、上位の人間が体現している「性質」が、実際に、下位の人間との比較において、より優れているものであることが保証される必要があるのである。具体的な条件として、大別すると、下記の2つのものがあるだろう。

- * Competency : Doing 領域における能力
- * Capacity : Being 領域における能力

インテグラル思想では、2種類の権威が設定されている。

- * Legitimacy : 水平的な意味における権威
- * Authenticity : 垂直的な意味における権威

父性の表現において重要なことは、権威というものを、形式的なものとしてではなく、常に実際の能力にねざしたものとして設定するということである。KW がしばしば指摘するように、人間とは、複数の知性 (Multiple Intelligence) の集合体であり、実際には、そのすべてにおいて優秀であることはできない。われわれにできることは、自分より優れた人物をまえにする状況において、「師」を見出すことのできる謙虚さを育むことである。また、同時に、われわれは、他者にあたえることのできるものを自己のなかに発見するときには、そのことに内在する責任を抱擁することができなければならない。そのとき、われわれは権威を体現することに躊躇してはならないのである。

本当に実力があるとか、本当に人格が立派だというように、内容を正しく評価した上で、相手の権威を認めて尊敬し心服するというのが、権威にたいする健全な態度である。それに対して相手が立派でもないのに立派だと勘違いして尊敬したり、あるいは自分が立派でもないのに権威を持っているかのように振舞ったりするのは、権威に対する健全でない態度ということができる。(林, 1996, p. 128)

価値相対主義の蔓延する今日の文化状況においては、権威にたいする健全な態度を確立することは非常に難しい。KWも“Boomeritis”という概念を用いてくりかえして強調するように、価値相対主義の蔓延は、あらゆる外的な批判の妥当性を否定する根拠をあたえることにより、結果として、人々のなかに自らの自己中心性を擁護する退嬰的な発想を定着させることになっている。“Nobody tells me what to do”という表現に代表されるこうした姿勢は、自己を唯一の権威として位置づけることをとおして、人々を果てしのない自我肥大の悪循環のなかに絡めとっているのである。

とりわけ、今日、国内・国外において大量消費されている「スピリチュアリティ」の大多数は、「ありのまま」の自己を肯定することをとおして、事実上、成長の可能性を剥奪する自我肥大の道具と化していることは留意されるべきであろう。今日、先進国において大量消費されているこれらの「スピリチュアリティ」をKWは、“Boomeritis Spirituality”と形容して、VL段階への集合的な意識の進化を阻止する最大の障害として位置づけている。

ただ、ここで留意すべきことは、価値相対主義の大儀のもと促進される権威の否定が、実際には、権威への執着を生み出すということである。林博士も指摘するように、既成の権威にたいする過剰な抵抗は、実際には自己の内部に息づく強烈な権威（支配欲）へのあこがれの表現なのである。つまり、こうした人格の人間（「権威主義的人格」）は、自分が希求している権威を（自分は所有することができないにもかかわらず）他者が所有していることにたいする強烈な怨念により動機づけられているのである。必然的に、こうした人格の人間は、内熟する怨念を糧にして、既存の権威にたいして強烈な抵抗活動を展開するが、また、同時に、自分自身を権威づけすることに非常に熱心である。

林博士によれば、こうした権威や権力にたいする異常な執着は、成長過程において、真の父性（Agape）をあたえられる経験をするのができなかったために、結果として、自己の内部に自己を超越した存在基盤（例：普遍的価値）を確立することに失敗した人間に見出される病理であるという。David Loy（1996）の指摘するように、窮極的には、「自己」とは虚構である。従って、人間が精神的な均衡を確立するためには、自己を超越するより普遍的（抽象的）な基盤（核・軸）を構築する必要がある。しかし、諸々の事情により、そうした存在の基盤を確立することに失敗した場合、人間は持続的な不安に曝されることになる。権威や権力にたいする異常な執着は、こうした不安を解決するための症状と理解できるのである。

今日、国内に蔓延している価値相対化の発想は、事実上、価値観との対峙・対決という自己を超越するための必須機会を剥奪することをとおして、人間の意識発達の可能性を根本的に抹殺することになる。価値観との対峙・対決という体験をおしてのみ——その価値観を肯定するか、または、否定するかは重要

ではない——人間は価値観というものについての感覚・感性を獲得することができる。

こうした基本的な感覚・感性を獲得することができないとき、人間は、方向性を設定して、自己の人生を主体的に生きていくことができなくなる。そこでは、秩序感覚という人格成熟のための必要要素が根源的に剥奪されているために、結果として、行動論理は生理的欲求に支配されることになるのである。

尚、“Boomeritis Spirituality”を特徴づける「感覚主義」(sensualism)や「体験主義」(experientialism)は、普遍的・抽象的な価値観にたいする感覚・感性を剥奪された場合において、不可避免的に結果する症状ということが出来るものである。そこでは、「スピリチュアリティ」が生理的衝動を充足するための道具として利用されているのである。また、「スピリチュアリティ・コミュニティ」に蔓延している人格崇拜の傾向は、抽象的な価値体系にたいする感覚・感性を確立することに失敗した場合に必然的に結果する、外的な存在にたいする依存体質が顕在化したものだということができるだろう。

現代の課題

上記のように、父性の欠如は、必然的に、集合意識の地盤沈下を招来する。とりわけ深刻なことは、父性の欠如が、幼少期の発達における重要要素である秩序を志向する潜在能力の開発を疎外することをとおして、人格成長の基盤構築を不可能にしてしまうことである。結果的に、これは、人間の意識成長の基本法則である自己中心性の克服という課題の解決を不可能にして、個人から共同体の構成員としての将来的な可能性を剥奪することになる。今日、多数の識者により指摘される集合意識の地盤沈下は、日本という共同体が個人を構成員としての必要成長段階までひきあげる育成能力を喪失しはじめていることを示唆しているのである。

共同体の構成員が意思疎通形態を共有することができないとき、構成員は相互の連帯の感覚(sense of solidarity)を経験することができないために、事実上、共同体は溶解しはじめることになる。また、構成員の内部に十分な規範感覚・秩序感覚を育成することができないということは、必然的に、共同体内における暴力的衝動の暴発が頻発化すること、つまり、共同体の治安が悪化することを意味する。

その意味では、21世紀において、日本という共同体は溶解の過程を急速に邁進しているということができるだろう。意識進化の先端がVL段階に到達しようとしている時代において、実際に必要とされているのは、非常に皮肉なことに、共同体の基本的な規範・秩序体系(Spiral DynamicsにおいてBlue vMemeと形容されているもの)なのである。

ただ、ここで留意すべきことは、こうした状況に対応するために必要とされているのが、必ずしも神話的合理性段階（Mythic Rationality）に退行することではないということである。確かに、共同体の基本的な規範・秩序体系を再生するという意味においては、神話的合理性段階により発想される意見を傾聴・尊重することが必要となるのは確かだろう。しかし、BMI の精神にもとづいてインテグラル思想を実践するうえで重要となるのは、むしろ、Green vMeme の欺瞞を効果的に批判することのできる Yellow vMeme 以上の価値体系を強力に提唱することであろう。

KW の示唆するように、共同体（Social Holon）の建設的な変容に寄与するために必要なのは、必ずしも、共同体の構成員の集合意識の重心をひきあげることではない（実際、人類の集合意識の重心が VL 段階に到達することは、将来的には、無いだろう）。むしろ、そこで必要とされるのは、共同体の支配的意思疎通形態を規定するための権力を「掌握」することなのである。

林博士の洞察するように、歴史的には、価値相対主義の蔓延を契機として、価値そのものにたいする否定が起り、そして、集合意識の地盤沈下が深刻化するときには、しばしば、共同体の混乱の最中、人格崇拜等をともなう全体主義が台頭している（例：ドイツにおけるナチス・ドイツの台頭；日本における軍国主義の台頭）。また、今世紀においては、自然環境破壊や自然資源枯渇等、こうした精神的な危機を増幅することになる物理的な危機が急速に深刻化している。その意味では、今世紀の危機は、過去のそれと比較しても、いっそう深刻なものであるということができよう。

集合意識が地盤沈下するとは、つまり、関心の範囲が縮小するということである。共同体の混乱が深刻化するなかで他者との連帯の感覚が喪失されるなかで、個人は、ますます、自己の利害のみを追求することになる。世界中心主義（world-centrism）や部族中心主義（ethno-centrism）といった共同体を機軸とする行動論理ではなく、極端な意味での自己中心主義（self-centrism）がはびこることになるのである。

インテグラル思想が「統合」を標榜するものである限り、インテグラル思想の実践において、同時代の現実と果敢に対峙するという責任を回避することはできない。KW が一連の著作を通じて Green vMeme にたいする批判を展開している背景には、こうした惑星規模の危機意識が息づいていることをわれわれは留意する必要があるだろう。

他人を押し退け、抜駆けをする競争ばかりが得意で、責任感と礼儀の感覚を欠き、原理原則や理念を持たない利己主義がはびこることは、人類の未来にとって恐ろしいことであるが、もっと恐ろしいことは「全体」という視点が欠如していることである。つまり、自分が得をすることばかりが関心事となり、自分の行動が全体にいかなる影響を与え、ひいては自分にも跳ね返ってくるという

問題意識が皆無なのである。人類全体の運命が自分の運命であるという巨視的視点を持たないのも……特徴である。（林, 1996, p. 191）

参考資料

- 林 道義 (1996) 『父性の復権』 中公新書
 林 道義 (1999) 『母性の復権』 中公新書
 Don Beck & Christopher Cowan (1996). *Spiral dynamics: Mastering values, leadership, and change*. Malden, MA: Blackwell.
 Jim Collins (2001). *Good to great: Why some companies make the leap...and others don't*. NY: HarperCollins.
 Jim Collins & Jerry Porras (1994/2002). *Built to last: Successful habits of visionary companies*. NY: HarperBusiness Essentials.
 Susanne Cook-Greuter (2005). Ego development: 9 levels of increasing embrace. Available at <http://www.cook-greuter.com/>
 Susanne Cook-Greuter (2005). On the development of action logics. Available at <http://www.cook-greuter.com/>
 Jorge N. Ferrer (2002). *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*. Albany: State University of New York Press.
 David Ray Griffin (1989). *God and religion in the postmodern world: Essays in postmodern theology*. Albany: State University of New York Press.
 George Leonard & Michael Murphy (1995). *The life we are given: A long-term program for realizing the potential of body, mind, heart, and soul*. NY: Jeremy P. Tarcher.
 David Loy (1996). *Lack and transcendence: The problem of death and life in psychotherapy, existentialism, and Buddhism*. Amherst, NY: Humanity Books.
 Bill Torbert and associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers.
 Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
 Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
 Ken Wilber (1999). *One taste: The journals of Ken Wilber*. Boston: Shambhala.
 Ken Wilber (2000a). *Collected works of Ken Wilber, Volume Seven*. Boston: Shambhala.
 Ken Wilber (2000b). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
 Ken Wilber (2001). *A theory of everything: An integral vision for business, politics, science, and spirituality*. Boston: Shambhala.
 Ken Wilber (2006). *Integral spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world*. Boston: Shambhala.